
学会賞受賞報告

大学院学位論文賞「児童書出版社の価値志向と利益志向： 日本における児童書専門出版社の図書出版活動に着目して」

Value Orientation And Profit Orientation of Children's Book Publishers : Focusing on Publishing Activities of Publishers that Specialize in Children's Books in Japan

聖徳大学 片山 ふみ

Seitoku University Fumi KATAYAMA

序章

本研究では、児童書出版社の図書出版活動（以下、出版活動）の特徴を、価値志向と利益志向（後述）に着目して明らかにすることを目的とする。

なお、本研究における児童書出版社とは、児童書の出版を主たる事業とする出版社（以下、児童書専門出版社）と総合出版社の児童書部門（以下、総合出版社）を指す。本研究では児童書専門出版社に着目し、比較対照として総合出版社を取り上げる。

通常、出版社は「利益を生ずる使命」と、「価値ある本を出版する信念」をもつ（シフレン、2002）。つまり、出版活動を把握する際にはこの2面性を押さえていく必要がある。また、児童書専門出版社は総合出版社に比べて規模が小さく、営業力や知名度の点で劣るため、市場において不利な状況にあるにもかかわらず、市場に参入している。つまり、児童書専門出版社は、何らかの価値的な動

機が、総合出版社よりも強いことが予想される。

本研究では児童書専門出版社の理念がどの点で活かされ、どの点で歪んでくるのか、そしてどのように経済的基盤をたっているのかを、具体例に則して明らかにする。

本研究における価値志向は、出版に関わる集団や個人が次代の社会や人間にとって大切であると考える何かを追究することである。これにはブルデューのいう非経済的資本（文化資本、象徴資本、社会関係資本等）の蓄積も含まれる。一方、利益志向とは、売上高を伸ばそうとすることで、ここには確実に利益が得られそうなものへの投資（流行にあわせた出版物の制作やプロダクトライフサイクルの短い製品の制作）も含まれる。

価値志向と利益志向は、ウェーバーの価値合理的行為、目的合理的行為から着想を得、さらに彼の理念型を援用した極的な尺度で、場面に応じてどちらが際立つかを判断するものである。このため、価値志向と利益志向は、全体の動きを把握す

るには有用であるが、両側面が併存する現実の複雑な状況を捉えきれない可能性がある。そこで、そのような複合的な細部については、ブルデューの資本の概念を用いる。ブルデューの概念は、非経済資本と経済資本が転換可能である点で流動的な尺度である。以上のように2つの観点をを用いることで、錯綜とした現実を捉えうる。

児童書出版社を上記のような視点で分析した研究は存在しない。価値志向や利益志向とほぼ同様の観点をを用いて出版活動を捉えようとした研究には、植田(1991)や箕輪(1991)のものがあるが、彼らはその志向を、本研究のように指標化して把握してはいない。佐藤ら(2011)は、「文化」「商業」「職人性」「官僚制」という枠組みを用い、学術出版社の出版活動を論じた。佐藤らは社員に対するインタビューの中で入社動機にも言及しているが、本研究のように社員の生立ちを追い、個人のなかにどのような価値観が形成され、それがどのように出版活動に影響を及ぼすかまでは踏み込まない。

このように、価値志向と利益志向を指標化して把握する点、多面的に出版社を把握する点が本研究の独自性である。

以上、本研究では、価値合理的行為を志向する可能性の高い出版界の人びとの特徴を把握する点で、行為の研究の一助となることができる。

本研究の本論(序章、終章を除く)は3章で構成され、中核となるのは第2章である。第1章は、第2章の導入、第3章は第2章の知見をより深める役割を果たす。

第1章 日本における児童書専門出版社史

第1章では、児童書専門出版社は、どのような目的で出版活動を行ってきたのかを、明らかにするため、2種類の文献調査を行った。

ひとつ目の調査では、児童書出版社の社史および各種文献から児童書出版界全体の歴史的動向の

把握をし、ふたつ目の調査では、児童書専門出版社4社の社史から創業以降の出版活動の変遷を把握した。

これらを通し、児童書出版業界全体に無私が報われる世界観があることや、総合出版社に比べて児童書専門出版社は、無私無欲なスタンスを強調することを指摘した。また児童書専門出版社のそのスタンスは、各社の企業理念においても具体的に現れており、利益を度外視してなんらかの価値を追求するという目的をもっていることがわかった。この目的の実現のため、社会関係資本や象徴資本の蓄積を戦略的に行う。具体的には、読み継がれる本を作るために、課題図書によって書店の書棚の一角を確保してきた。また、学校図書館ルートにおいては、現場で必要とされる本作りを考え、長年にわたって教育現場と密接にコンタクトをとり、関係を築き上げた(1950年代)。しかし、同業者同士の人脈は、学校図書館市場で総合出版社よりも多くの利益を得ようとする児童書専門出版社同士の営業協力(巡回グループ、SLBA)につながり(1970年代から)、学校図書館関係者との人脈は、学校図書館に必ず購入されるテーマをもつ商品の制作につながっていく(1950年代後半から)。つまり社会関係資本を経済資本に転換させていく状況が明らかとなった。

第2章 児童書専門出版社の価値志向と利益志向

第2章では、児童書専門出版社が現在どのような目的をもち、出版活動を行っているのかを明らかにする。まず、児童書専門出版社9社16名と総合出版社9社11名に、次に、児童書専門出版社1社1名、総合出版社社員2社2名に聞き取り調査を実施した。前者では、社員に共通する意識を把握しようとし、後者では、ライフヒストリー調査の手法に基き個別的な視点で社員の意識を把握しようとした。

これらの結果、児童書専門出版社の特徴として、学校図書館ルートでは企業理念を措いて利益の追求をめざし（利益志向）、書店ルートでは企業理念ののりつった価値を追求しようとする点（価値志向）が明らかとなった。この背景に、学校図書館ルートは児童書専門出版社の独占領域で、利益を追求する場として機能させやすいと現場では認識されていることもわかった。

第3章 児童書専門出版社の 学校図書館ルートを支える背景

第3章では児童書専門出版社は、出版社以外の周辺組織との関係のなかで、どのようにその目的を達成しているのかを明らかにするため、学校図書館市場に着目してその背景を掘り下げた。この章では、制作面に関する事例調査と流通面に関する事例調査による把握を行った。

制作面を掘り下げる調査では、編集プロダクション2社と児童書専門出版社2社に、流通の側面を把握する調査では学校図書館職員や、関係組織（全国SLA、SLBA、TRC）に聞き取り調査を実施した。

これらの結果、学校図書館向け市場では、その制作、流通の両面で、児童書専門出版社が利益の回収を確実にできる仕組みが整っていることを指摘できる。具体的には、児童書専門出版社は、学校図書館向け書籍の制作を編集プロダクションに一任することで、安くコンスタントにライフサイクルの短い商品を作成できる環境を作っている。

また、全国SLAの調査結果から、課題図書・選定図書の選定において優先的に選ばれる出版社が存在することがわかった。さらにSLBAの調査から、SLBAが児童書専門出版社を支援する機能をもつことがわかった。全国SLAの選定委員は、SLBA選定図書の選定委員も兼ねていること、そして課題図書とSLBA選定図書は全国SLA選定図書から選ばれることから、児童書専門出版社が、課題図書、

全国SLA選定図書、SLBA選定図書において、優先的に選ばれている可能性が示唆された。そこで、課題図書に着目し、児童書専門出版社と総合出版社の被選定回数の差をt検定で比較した。その結果、少なくとも2005年以前までは、児童書専門出版社がより選ばれやすいことがわかった。

終章

本研究で明らかとなった児童書専門出版社の出版活動の特徴から全体を通じて、「本来、価値を高めるためのメカニズムが、利益を生み出すメカニズムとして機能している」という逆説的な状況を指摘できる。具体的には、児童書出版業界全体が価値を志向し、それが利益にもつながった成功事例（ロングセラー）が、現在、書店の書棚を占拠している。このことによって残りのスペースは限られる。この限られたスペースに対する棚争いで、総合出版社に太刀打ちできない児童書専門出版社は、課題図書などに選ばれる仕組みを制度化して、書店の棚に食い込んでいかざるを得ない。

しかもそれだけでは経営が成り立たないため、学校図書館を独占領域にし、利益を回収するルートとして位置付けていく。つまり、学校図書館に関係する種々の制度や優れた新刊書を子どもたちに紹介する課題図書選定制度等、本来、価値志向を実現するメカニズムが、利益を生み出すメカニズムとして機能している。

本研究は、従来研究がなされてこなかった児童書出版社に焦点を当て、児童書専門出版社の出版活動を理解するための視点を、いくつかの事例から提示した。先行研究として先に挙げた植田（1991）は、現代に文庫本の文化的役割を甦らせるには真のエディタースhipが必要であると、個人の資質に収斂させる議論をした。また佐藤ら（2011）は、本研究でいう利益志向に相当する指標は変化し、価値志向に相当する指標は変化しないと述べる。

本研究では、より良い本を作ろうという意図が、逆説的に利益志向を生み出すという仕組みを抽出した。このように、意図と結果のパラドックス（マートン、1977）に通じる事例を出版界に見出した点は、どの先行研究にもなく、新たな知見である。

最後に今後の課題を述べる。

まず、社史で把握した1950年代から1980年代と、聞き取り調査で捉えた2003年以降との間の空白期間を埋める必要がある。今後は、社史以外の資料をより多く用い、聞き取りデータを積み上げることでこの点を補充していきたい。

次に、本研究で得た知見を精緻化するための課題として、具体的な場面における意思決定の把握が挙げられる。新人の発掘・育成、執筆依頼、原稿採択、部数・定価の決定、題名・デザイン決定、広告の追加あるいは削減、重版の可否などを個々の原稿ごとに細かく把握することでより実態に即した議論が可能となるだろう。

以上の点をはじめとして、今後も追調査等を通し、研究を発展させたい。

参考文献

Bourdieu, Pierre. 実践感覚, 1. 今村仁司, 港道隆共訳. みすず書房, 1988, 281p.

Bourdieu, Pierre. ディスタンクシオン：社会的判断力批判, 1. 石井洋二郎訳. 藤原書店, 1990, 501p., (Bourdieu library).

Bourdieu, Pierre. 芸術の規則, 1. 石井洋二郎訳. 藤原書店, 1995, 394p., (Bourdieu library).

Bourdieu, Pierre. 芸術の規則, 2. 石井洋二郎訳. 藤原書店, 1996, 312p., (Bourdieu library).

佐藤郁哉, 芳賀学, 山田真茂留. 本を生み出す力：学術出版の組織アイデンティティ. 新曜社, 2011, 584p.

Merton, Robert King. 社会理論と社会構造. 森東吾訳. みすず書房, 1977, 576p.

箕輪成男. 特集, マスメディアの文化性と経済性：出版事業の経済的条件. 放送学研究. 1991, no. 41, p.85-106.

Schiffirin, André. 理想なき出版. 勝貴子訳. 柏書房, 2002, 272p.

植田康夫. 特集, マスメディアの文化性と経済性：出版の文化的役割と出版文化の再生. 放送学研究. no.41, 1991, p.67-84.

Weber, Max. 社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」. 富永祐治ほか訳. 岩波書店, 1998, 345p.